

着物と私(3)

着物と日本人

岡崎 陽子



着物は日本の民族衣装です。何を当たり前なことを言うのか、と思われるかもしれませんが。でも私は着付けを習い、着物を着るようになって始めて、このことが実感できるようになりました。私の普段の生活から、着物は遠いものだったのです。綺麗だけれども、窮屈そうだし、動きづらそうだし、値段も高そう。式典やお祭りの時だけの、特別な衣装だと思っていました。確かに着物は洋服に比べ、動きに制約が加わります。腕を高く上げたり、走ることは出来ないし、脱いだ後も洗濯機にそのままポイなんてことは出来ません。使い勝手の悪いもの、時代に合わないものは廃れていくといえます。着るものだって時の流れと共に変わっていくでしょう。

しかし、使い勝手が悪いから着物が廃れていく、とはどうにも思えないのです。なぜなら、暑い夏、薄物は洋服よりも通気性がいいし、日傘をさして歩いている姿などは、露出の多い洋服姿よりも爽やかに見えます。冬は全身をすっぽり包みますから、なかなか温かいです。つまり、何百年という長きにわたって着てこられた民族衣装だけに、日本の気候にとてもよく合っているのです。また、動きに加えられる制約、というのはプラスにも働きます。普段どんなに大股で歩いている人でも、楚々と落ち着いた動きになりますし、背筋もピンと伸びます。私は日本人は、着物の方が百倍も素敵だと思うのです。アフリカのカラフルな色使いの衣装や、ヨーロッパのゴージャスなドレスは現地の人が一番似合うだろうし、その人自身が魅力的に見えるでしょう。それと同じように、日本人には着物が似合うと思うのです。京都の街中では、老若男女様々な着物姿の方を見ますが、やはり皆さんとても素敵です。

着物を身に着けるようになって、季節の移り変わりにも敏感になりました。春は桜・桃・つつじ、夏は朝顔・ダリア・貝、秋は紅葉・菊・葡萄、冬



は椿・南天・梅。着物の柄には、日本の四季が深く感じられます。着物と季節は切っても切れない関係なのです。ドットやチェックなどの柄も素敵ですが、周囲の自然の変化に溶け込むような、四季折々の装いを楽しむのも素敵だと思います。

私が好きな着物に、アンティーク着物というものがあります。明治・大正～昭和初期の古い着物のことをいうのですが、現代のものにはないような柄がとても新鮮で面白いです。また、この時代の着物は技術的にも素晴らしく、現代の技術をもってしても同じ色は出せないのだそうです。私が行く着物の古着屋さんにも、アンティーク着物を扱っているところがあるのですが、何十年も前の着物が、着用できる状態で残っていることに感動してしまいます。昔の人は今よりうんとものを大事にしたのでしょう。

最近はファーストフード店や、ファーストファッションブランドが隆盛を極めていきます。流行はすぐに移り変わり、数年前のものでも古いとされます。そんな時代の中で、着物は違います。お母さんやおばあちゃんのもので古臭いとは思わないし、自分の子供にだって同じものを着せてあげられるでしょう。もったいない、という言葉を生み出した日本人は、歴史あるものを大切にする民族だと思います。そんな私たちが、自分たちの民族衣装を着ないというのは、少し、もったいないのではないのでしょうか。

おかざき ようこ (2009年度英米語学科卒業生)